

オリンピックを通してつかんだ水泳の心

「一着、鶴田、ニッポン、タイム二分四十五秒四……。」
まず英語で、そして日本語で場内アナウンスが優勝を知らせました。水の中で二連覇を知った鶴田選手は、プールからは上がりません。しかし、全力を出し切った体は、もう余力はありません。プールサイドにがつくりひざをつき、血が流れ落ちました。三十歳の鶴田選手が、オリンピックで二連覇という偉業を成しとげた瞬間です。それは無欲でつかみ取った金メダルでした。

鶴田義行さん。明治三十六年十月、鹿児島郡伊敷村（鹿児島市）に十二人兄弟の二男として生まれました。

小学校時代、当時義行さんが通っていた学校では、盛んに「棒倒し」が行われていました。体の大きい義行さんはいっも一番下で棒にしがみつく役ばかりしていました。それは誰の目にも地味で損な役回りでした。ある日、そんな役回りをする義行さんを見かねてお母さんは「たまには攻撃する方に回っては」と言いました。その時、義行さんは「何を言うんだ母さん。棒倒しじゃ俺のところが一番大事なんだ。」と答えたと言います。お母さんはその時嬉しくて涙を流しながら喜んで、なお一層義行さんを褒めました。

義行さんが泳げるようになったきっかけは、家の目の前を流れる甲突川。夏の暑い日、溺れそうになりました。義行さんは、翌日から一人、猛烈に泳ぎを練習しました。負けず嫌いの甲突川で遊んでいる時も仲間が流れに任せて下流へ泳ぐのを尻目に上流へ泳いだという話や、川を下って海まで泳いで往復したという話も残っています。義行さんは誰にも水泳を習っていません。「泳ぎはいつも自分の体で学ぶ。」これが鶴田義行流の水泳のトレーニングでした。

小学校を卒業した義行さんは、日本国有鉄道（現JR）の鹿児島機関区に就職しました。機関助手として石炭をくべる

鶴田 義行



（参考）棒倒しのルール
二分のうちに、相手の棒を倒したチームが勝ち。一チーム百五十人が攻撃と防御に分かれる。相手にケガをさせるような危険なことは禁止されている。
（防衛大学校Webサイトより）
競技時間や一チーム当たりの人数については、とくに決まりはありません。





仕事をしており、たくさん石炭で一日中釜をたくこの仕事
が義行さんの人並外れた体力を作りました。仕事の合間の楽
しみは錦江湾で泳ぐことでした。「好きこそ物の上手なれ。」
と言いますが、義行さんは桜島までの往復八キロメートルを
泳ぎ切る腕になっていました。

その後義行さんは、徴兵検査を受け（海にあこがれ）海軍の
佐世保海兵団に入隊し、巡洋艦「由良」に一等機関水兵とし
て乗り組みました。仕事場である機関室はとても暑く、義行
さんは暇さえあれば、海で泳いでいました。ある日、そんな
泳いでいる姿を見た艦長は、義行さんを部屋に呼びました。

義行さんは大目玉を喰らって怒られるだろうと思っていました。ところが、艦長は義行さん
の泳ぎを褒めた上で、「海軍を代表して、明治神宮競技大会（現国体）に出なさい。」という
ことでした。



明治神宮競技大会の水泳競技で海軍が勝つために、全国か
ら優秀な人材が集められていました。こうして初めて鶴田選
手は生まれて初めてプールで激しい訓練を受けることにな
りました。水泳が辛く厳しく耐えるものにもなりました。大
正十四年十月十一日、明治神宮競技大会水泳競技男子二百メ
ートル平泳ぎに鶴田選手は出場。他を寄せ付けず新記録で優
勝、一躍注目を浴びました。

鶴田選手は、その後も泳ぐたびに日本記録を更新。海軍をやめて新聞社に入社し、アムス
テルダムオリンピックピックに備えることになりました。一日に一万メートル泳ぐことを自らに

課し、三年間、一日も練習は休みませんでした。「甘えてい
ると自分がダメになる。」と自分に言い聞かせて、新聞社で
の仕事懸命にこなした後、練習に参加しました。一万メー
トルを泳ぎ終えると帰宅は夜の十一時すぎになることもし
ばしばでした。一年の内で鶴田選手が泳がない日はなく、た
とえ冬、氷が張り詰めていてもプールの氷を割って泳ぎ続け
たと言います。鶴田選手はこう言っていました。「練習とは、
苦しみに耐えることです。」

水泳は、プールの中を行ったり来たりします。競技そのも
のが単調だから耐えることが何より求められるのです。



昭和三年七月、日本オリンピック水泳チームはシベリア鉄道の二週間の長旅を終えて、ア

ムステルダムに乗り込みます。食べもの、風土、生活様式が日本とは異なるため、コンディションは最悪でした。おまけにオリンピックプールでの練習禁止。困り抜いた日本チームは、止む無く苦肉の策として川で泳ぎました。飛び込んだのが、宿舎近くのどぶ川。長旅の疲れと汚れた川の練習で選手達は次々と体調を崩してしまいました。

一方、オランダの選手達が密かにオリンピックプールで練習していると聞き付けて、鶴田選手もプールにこっそり入って練習を試みました。事前にオリンピックプールを見学することができたため、オリンピックプールに波を消すためのオーバーフローと呼ばれる溝がないのを発見することができました。日本の選手達は当時、日本のプールにはあるオーバーフローにつかまってターンしていたので、鶴田選手の発見は日本チームにとっても役立ち、他の選手達から喜ばれました。

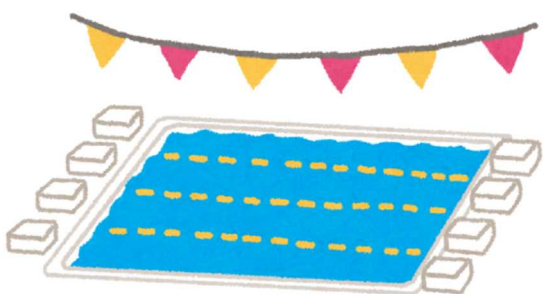
昭和三年七月二十八日、アムステルダム大会が始まりました。鶴田選手は、オーバーフローをつかまないターンを特訓しました。「納得するまで自分の体で覚える。」と特訓した成果が実り、鶴田選手は絶好調でした。予選、準決勝とオリンピック新記録で通過しました。日本チームの鶴田選手への期待は高まりました。

しかし、世界記録保持者のラーデマツハー選手（ドイツ）が出場するとあって、鶴田選手の記録に関心を寄せている外国のメディアはあまりいませんでした。八月八日、二百メートル平泳ぎ決勝、この日会場はドイツから応援団が駆け付け、ラーデマツハー選手への応援一色でした。「練習より試合の方が楽なのだ。」と鶴田選手は自分に言い聞かせ、スタート台に立ちました。隣の四コースには、声援を受ける世界記録保持者のラーデマツハー選手が目をつぶって何かつぶやきました。離れた一コースには、極東選手権競技大会チャンピオン・イルデフォンゾ選手（フィリピン）が胸に十字を切りました。

「これがオリンピックというものなのか。」いつものレースと違い鶴田選手の鼓動は高鳴るばかりでした。

「パーン。」

鶴田選手は、スタート良く一気に飛び出しています。しかし、試合運びが巧みな隣のラーデマツハーも譲らず食い付いてきます。五十メートルのターンは、鶴田選手、ラーデマツハー選手、イルデフォンゾ選手。しかし、ここで鶴田選手は大いなる勘違いをしました。水の



中から頭を上げる度に聞こえる歓声にラーデマツハー選手が今リードしていると思ったのでした。百メートルをターンすると鶴田選手は渾身の力を込めて更にスピードを上げました。ラーデマツハー選手への声援が皮肉にも鶴田選手のリードを広げたのでした。百五十メートルのターンが終わり残り五十メートル。ラストスパート。

「ゴール。」

こうして鶴田選手はオリンピック新記録で金メダルのゴールに飛び込んでいました。



鶴田選手はこの時の様子を後にこう言っていました。

「嬉しいというよりは悲しく、悲しいというよりも楽しく、水の中で夢のようにボートしていました。」

まさか日本人が優勝するとは思いませんでした。大会関係者もそうでした。このため、表彰式にやっと用意された日の丸は他の国の旗に比べ異常に大きなものでした。「二百メートル平泳ぎ、二分四十八秒八、鶴田優勝。」その頃、日本では号外の鈴がなりました。レース後には、ライバルのラーデマツハー選手と固い握手をしました。

金メダルをみやげに鶴田選手は帰国後、大学に入学、全盛期を迎えました。東京玉川プールにドイツチームを迎え、再びラーデマツハー選手を破り、ハワイ遠征では二百メートル二分五十三秒の全米新記録をマーク、世界の平泳ぎの第一人者になりました。



しかし、人気絶頂の鶴田選手が敗れました。東京で開かれた極東選手権競技大会でアムステルダム大会銅メダルのイルデフオンズ選手に敗れるのでした。しかも、三位という惨憺たる結果でした。鶴田選手は既に二十六歳。肉体的には限界にきていました。水泳選手は短命で男子選手は当時だいたい二十二・三で終わる選手が一般的でした。もう、一日一万メートル以上泳いでも記録が上がることはありませんでした。日本選手権では、鶴田選手を破る小池礼三選手という十五歳の少年選手も登場していました。鶴田選手も引退を考えていました。

こうして鶴田選手は新しい人生を切り拓くべく昭和六年に新聞社の取材で知り合った女性と結婚をしました。翌春には大学を卒業し、満州（現在の中国東北部）に職を求めました。

昭和七年五月に出張で東京に戻った折、就職の報告を日本水泳連盟にするために訪れました。この時、末広会長は申し訳なさそうに鶴田さんにこう切り出しました。

「今度のオリンピックもぜひ金メダルを取りたい。だが、優勝を狙う小池選手はまだ十六

歳。経験もまだ浅い。悪いが君に練習相手になってもらいたい。」

この時鶴田さんは悩みました。妻は妊娠していました。オリンピックに出ればようやく決まった就職がダメになるかもしれませんでした。しかも今は就職難の時代でした。

しかし、頭を下げられると断れない鶴田さんでした。

こうしてペースメーカーとしての日々が始まりました。十六歳の伸び盛りの小池選手と二十八歳の下り坂の鶴田選手。力の差は歴然でした。小池選手の自信を付けさせるとはいえ負け続ける毎日。それは鶴田選手にとって栄光もプライドも捨てた屈辱の日々でした。

昭和七年七月九日、ロサンゼルス大会に向け日本選手団は選手村に入りました。選手団の中には、小池選手を優勝させるために参加する鶴田選手の姿もありました。しかし、日本チームがオリンピックプールで練習を始めると不思議なことが起こりました。何とまるで奇跡のように鶴田選手の記録が上がり始めたのです。七月三十日、ロサンゼルス大会開幕し、復調著しい鶴田選手は予選を突破。準決勝は小池選手に続いて二位。日本チームの誰もが金メダル確実な小池選手に続き、鶴田が銀メダルを取ることを願いました。

しかし、決勝前夜、小池選手はプレッシャーで眠れずに、鶴田選手の部屋を訪れました。鶴田選手は、小池選手の気を落ち着かせて部屋に帰したものの、明日を考えると憂鬱になりました。

「小池選手はダメかもしれない。でも明日は強敵イルデフオンゾ選手が出る。小池選手のための何か良い作戦はないだろうか。」八月十四日、二百メートル平泳ぎ決勝の日は明けました。鶴田選手はある作戦を秘めスタート台に立ちました。

「パーン。」

鶴田選手はスタートから一気に飛び出していました。

「最初から飛ばす。」これが鶴田選手の作戦でした。鶴田選手は最初の五十メートルをトップで折り返しました。百メートルは鶴田選手とイルデフオンゾ選手が並んで折り返しました。

「強引な先行策でイルデフオンゾ選手のペースを乱す。」これが鶴田選手の作戦でした。鶴田選手の作戦は当たりました。イルデフオンゾ選手は後半ペースを乱し、代わりに睡眠不足の小池選手がようやく追いついてきました。

一位鶴田選手、二位小池選手。

決勝では驚くことに、自己のベスト。しかも、アムステルダム大会のときより、三秒四短



縮、二分四十五秒四で二個目の金メダルをとりました。こうしてオリンピックの二連覇は達



成されました。正に自分を捨てたところで拾った金メダルでした。「うれしいというよりも、ああこれで終わったという虚脱感におそわれた……。」と優勝の瞬間の感想を語っています。これは年齢のハンデいを根性で克服した鶴田選手にしてみれば、勝敗よりも「すべてを尽くし切った。」という自己満足の方が強かったのではないのでしょうか。

このロサンゼルス大会で、日本チームは水泳六種目中、十二のメダルを取り、以後水泳王国日本と世界に恐れられるようになりました。それは、正に鶴田選手に憧れ水泳を目指した若者達によって築かれた偉大な王国でした。しかし、鶴田選手はその栄光に酔いしれることなく一人静かに去っていきましました。



愛媛県松山市。戦後、鶴田さんはオリンピックでの栄光を自ら隠すようにこの松山の地で子供たちの水泳指導に黙々と打ち込んでいます。鶴田さんの知人は、「どちらかというと、オリンピックで勝ったとか、ゴールドメダリストです、とかを努めてあまり表に出さない人でした。」と言っています。また、鶴田さんの御息女は、「わずか一秒とか0コンマ何秒とか人より速かっただけではないかと父は言っていました。」と口にしていきます。鶴田さんが二つの金メダルで本当に得たもの、それは栄光ではなくオリンピックを通して自らがつかんだ水泳の心でした。鶴田さんはそれを子供達に伝えたかったです。

「苦しみから逃げる者は、永久にその苦しみに追われる。苦しみから逃げてはいけません。」

鶴田さんはよくこう言ったと言います。

昭和六十一年、鶴田義行さんは五万三千人もの子供達にその心を伝え、この世を去りました。

参考・引用文献及び資料

「郷土の人系 中巻」(南日本新聞 昭和四十四年)

「知ってるつもり」(日本テレビ 一九九二年七月十二日放送)

防衛大学校Webサイト「KIDS みどころ」(令和三年一月アクセス)

5537字